

エケベリアの育て方

Echeveria

ベンケイソウ科 / Crassulaceae

葉が放射状に重なる美しいロゼット、紅葉、そして白い蠟質粉末ファリナ（白粉）の三拍子が揃う多肉植物。属間交配も盛んで、SEEDSTOCKの人気種子ラインナップの中核を担う属です。

概要・魅力

エケベリア（Echeveria）は、ベンケイソウ科を代表する多肉植物の属です。葉が放射状に重なり合う美しいロゼット、温度差・日照・乾燥ストレスによって赤・オレンジ・ピンクに染まる紅葉、そして葉面をまとう白い蠟質粉末のファリナ（白粉）——この三つが、世界中の園芸愛好家を魅了し続けてきた核心です。Plants of the World Online（Kew）が受理する承認種数は約206種で、そのうち約95%がメキシコ固有種。シエラ・マドレ山脈や横断火山帯を中心とした標高1,000～3,000mの岩場・雲霧林に自生し、岩肌にロゼットを広げながら乾季を生き抜いています。

ファリナ（白粉）は単なる装飾ではありません。蒸散を抑え、強い日光を反射・散乱させて葉の温度上昇を防ぎ、紫外線から組織を守る機能を持ちます。触れると取れてしまい元には戻らないため、扱う際は注意が必要です。一方、紅葉はストレス環境に応じて葉縁や葉全体が発色する現象で、この美しい変化もエケベリアの大きな見どころのひとつです。

代表的な種はいずれも個性豊かです。

- **Echeveria elegans（月影）**：銀緑色の透き通るようなロゼットが美しい入門種。流通量が多く最も手に入れやすい基本種の一つ。
- **Echeveria laui（ラウイ）**：パウダーブルー～淡ピンクの厚いファリナが株全体を包む美種。メキシコ・オアハカ州の石灰岩質岩壁に自生する。
- **Echeveria agavoides（相府蓮）**：アガベを思わせる鋭い葉先が特徴。紅葉時は葉縁が鮮やかな赤に縁取られ、その対比が美しい。
- **Echeveria 'Perle von Nürnberg'**：1930年代にドイツで作出された古典交配種。淡紫～ピンクの半透明な葉質と端正な

基本データ

🌱 成長期	春秋型（春・秋生育、真夏・真冬は休眠気味）
🌡 耐寒温度	最低5℃が目安（園芸情報・種差あり）
☀ 日照	日なた（真夏は遮光。徒長防止に日照重要）
📅 播種適期	3月下旬～5月（秋の9～10月も可）
🕒 発芽日数	20～25℃で4～14日（温度依存）
📍 主原産地	メキシコ中心（約95%が固有）～中南米
📏 難易度	

ロゼットが今なお世界中で愛される。英国王立園芸協会（RHS）Award of Garden Merit受賞。

エケベリアの楽しみのひとつが、属をまたいだ交配の容易さです。Graptopetalum（グラプトペタルム）との×Graptoveria（グラプトベリア）、Pachyphytum（パキフィツム）との×Pachyveria（パキベリア）、Sedum（セダム）との×Sedeveria（セデベリア）といった属間交配種が育成・流通しています。分子系統解析においてEcheveria属が近縁属と系統的に絡み合う非単系統の属であることが繰り返し示されており、属をまたいだ交配の容易さとも関係していると考えられています。

光合成については多くの種がC3型と考えられていますが、乾燥ストレス下では兼性CAM的な性質を示す可能性が指摘されています。ベンケイソウ科全体でCAM光合成が広く見られることと整合する知見であり、乾燥への高い適応力の一端を担っている可能性があります（エケベリア属本種での直接的な実測研究のさらなる蓄積が期待されます）。

造形美、豊富なカラーバリエーション、そして実生育種の奥深さを兼ね備えたエケベリア。多肉植物のなかでも特に多彩な表情を持つこの属の種子を、SEEDSTOCKでは幅広くラインナップしています。

置き場所

エケベリアは日当たりと風通しのよい場所を好みます。日照が不足すると茎や葉の節間が伸びる徒長が起き、ロゼットの締まりが失われます。葉色の発色も日照量に大きく左右されるため、置き場所の選択が育成の鍵を握ります。

春（3～5月）・秋（9～11月）

生育が最も旺盛になる時期です。屋外の日当たりと風通しのよい場所に置き、直射日光を1日4～6時間以上当てましょう。春先はまだ寒の戻りがあるため、最低気温が5℃を下回りそうな夜は室内に取り込みます。秋は気温が下がるにつれて水やりを徐々に減らし始め、11月中旬を目安に室内管理へ移行します。

夏（6～9月）

日本の梅雨～真夏は高温多湿が重なり、エケベリアには最も過酷な季節です。遮光50～70%のネットを活用し、雨の当たらない軒下やビニール温室へ移動させましょう。扇風機やサーキュレーターで風を通して蒸れを防ぐことが、夏越しの最重要ポイントです。ファリナの厚い種（E. laui等）は強い直射でファリナが損傷することがあるため、より丁寧な遮光を心がけます。

冬（11～3月）

最低気温が5℃を下回る前に室内の明るい窓辺へ移します。エケベリアの耐寒性は種によって差があり、乾燥した状態では0℃前後まで耐える種もありますが、湿った状態での低温は根腐れを招くため保証はありません。日本の栽培では5℃以上を安全目安として管理しましょう。室内でも空気の流れを意識し、こもった湿気が病虫害や根腐れを招かないよう注意します。

ロゼット中心（株の芯）に水が溜まると蒸れ・腐れの原因になります。雨後や水やり後は、ブローヤや息を吹きかけて水滴を飛ばす習慣をつけましょう。特に梅雨の時期は、雨の当たらない場所での管理が有効です。

○ 水やり

エケベリア栽培で最も多い失敗が水のやりすぎによる根腐れです。春秋型のエケベリアは、生育期にしっかり水を与え、真夏と冬は大幅に控えるメリハリが欠かせません。また、ロゼット中心に水が溜まると葉の付け根が腐りやすいため、水やりの場所にも注意が必要です。

生育期（春・秋）

鉢土の表面が完全に乾いてから、鉢底から水が流れ出るまでたっぷり与えます。目安は1～2週間に1回程度ですが、鉢のサイズ・気温・用土によって変わります。少量をちょこちょこ与えるのではなく、「しっかり乾かしてからたっぷり」を繰り返すことで根が深く張り、丈夫な株に育ちます。

真夏（準休眠期）

梅雨から8月下旬にかけては生育が著しく鈍り、水を吸う量が大幅に落ちます。水やりは10日～月1回程度に減らし、与える場合は涼しい夕方以降に行いましょう。高温多湿の時期に過湿になると根腐れ・蒸れが一気に進むため、疑わしいときは与えないくらいの気持ちで管理します。

冬（休眠期）

生育はほぼ止まります。2～4週間に1回程度、ごく少量を目安に与えます。葉がしわしわに萎れてきたら補水のサインです。低温と過湿の組み合わせが根腐れの最大リスクなので、迷ったら「もう数日待つ」くらいが安全です。

肥料

自生地は岩質のやせた土壌のため、肥料は控えめが基本です。生育期に薄い液体肥料（1,000～2,000倍に希釈）を月1～2回程度与えるにとどめ、多肥は徒長や根の傷みの原因になるため避けましょう。秋以降～冬は施肥を停止します。

水やりはロゼットの中心を避け、株元の用土に直接与えましょう。葉の上から水をかけると中心に水が溜まり、腐れを招きます。腰水（底面給水）は実生・幼苗期以外の成株には基本的に行いません。

🔧 用土・植替え

エケベリアの自生地は岩質・砂質で排水性の高い土壌です。栽培でも水はけのよい用土を選ぶことが根腐れ予防の基本です。

用土の配合例

- 手軽な方法：市販のサボテン・多肉植物用培養土をそのまま使用。
- 自家配合（基本）：赤玉土（小粒）4 + 鹿沼土（小粒）2 + 軽石（小粒）2 + くん炭等2の無機質中心配合。
- 水はけ重視（梅雨が多い地域向け）：赤玉土3 + 鹿沼土3 + 軽石3 + バーミキュライト1など、軽石の比率を上げてさらに通気性を高めた配合。

鉢は素焼き（テラコッタ）や駄温鉢など、余分な水分を吸収しやすい通気性の高いものが向いています。排水穴は必須で、鉢底にひと回り大きな粒の軽石を敷くと排水性がさらに向上します。受け皿に水を溜めたままにしないことも大切です。

植替えの時期と頻度

適期は3～5月（春）または9～10月（秋）で、生育期の入口が最善です。真夏と冬の植替えは根へのダメージが大きいため避けましょう。頻度は1～2年に1度が目安で、根詰まりや用土の劣化（水はけが悪くなる・根が鉢底から出てくる）が見られたら早めに行います。

植替え時は古い下葉と傷んだ根を取り除き、切り口を数日陰干しして乾燥させてから新しい用土に植え付けます。植え付け後は1週間ほど水やりを控え、根が新しい土に馴染むのを待ちましょう。その後は遮光を強めて根の定着を促します。

実生苗の用土は特に清潔さが重要です。有機物の多い培養土はカビ・立ち枯れが起きやすいため、赤玉土細粒とバーミキュライトを中心とした無機質配合（有機分を極力排除）を選びましょう。苗

が大きくなり成株に近づいたら通常の配合に移行します。

🌱 発芽のさせ方

エケベリアは実生（種まき）に挑戦しやすく、交配育種も楽しめる属です。種子は非常に微細で取り扱いに少しコツがありますが、温度と湿度をきちんと管理すれば初心者でも発芽を体験できます。播種の適期は気温が安定する**3月下旬～5月（春播き）**。秋（9～10月）の播種も可能ですが、その後の冬の低温管理が課題になるため、春播きの方が発芽後の管理がしやすい傾向があります。SEEDSTOCKの種子は新鮮さを重視してお届けしていますが、エケベリアの種子は鮮度が発芽率に直結するため、入手後はなるべく早く播種してください。

発芽までの手順

1. **用土を準備・殺菌する**：赤玉土（細粒）とバーミキュライトを中心とした無機質配合の用土を容器に入れ、熱湯消毒または電子レンジ加熱で殺菌します。古い土の使い回しはカビ発生の原因になるため使いません。実生用の浅い鉢や育苗トレイが種の観察もしやすく扱いやすいです。
2. **用土をしっかりと湿らせる**：播種前に用土をあらかじめ十分に湿らせておきます。後から上から水をかけると微細な種子が流れてしまうため、先に湿らせておくことが重要です。余分な水は鉢を傾けて抜き、表面が落ち着いてから播種します。
3. **種子を表面に置く（覆土しない）**：エケベリアの種子は好光性種子です。光が当たることによって発芽が促されるため、**覆土は一切しません**。湿らせた用土の表面に種子が重ならないようにばらまき、指や竹串で軽く押しつける程度にします。ベンケイソウ科の近縁種でも同様の光発芽性が確認されており、微細な種子ほど光への依存度が高い傾向があることが研究で示されています。
4. **腰水（底面給水）をセットする**：播種後は上から水をかけてはいけません。種が動いてしまいます。受け皿やトレイに水を張り、鉢底から吸水させる腰水方式で管理します。水面の高さは鉢土の高さの7～8割程度が目安です。殺菌剤（ダコニール等）を1,000倍に希釈して腰水に使うと、カビ・立ち枯れの予防に効果的です。
5. **高湿度と温度を保つ**：透明なフタやラップで容器を覆い、高湿度を維持します。**発芽適温は20～25℃**が目安です。30℃を超えると発芽が著しく遅れたり止まったりする場合があるため、高温期の播種には注意が必要です。強い直射は避け、明るい日陰またはLEDライト下で管理しましょう。
6. **発芽を待つ**：条件が整えば**早い種子は4～7日**で発芽が始まり、**ピークは10～14日**前後です。遅いものは3～4週間以上かかることもあります。1ヶ月経っても発芽しない場合は温度や湿度を見直しましょう。種子の鮮度が高いほど発芽が早く揃い、発芽率も上がります。
7. **発芽後の管理（通気・遮光）**：芽が出始めたら徐々にフタを開けて通気を確保します。一気に開けると乾燥で苗が傷むため、少しずつ慣らしましょう。置き場所は**50%遮光の明るい半日陰**に移します。腰水は発芽後も**2～3ヶ月**

間は継続し、苗が乾かないよう管理します。発芽1ヶ月後頃から薄めた液体肥料を開始するのも有効です。

8. **鉢上げ（仮植え）**：発芽後2～3ヶ月で苗が1～2cm程度に育ったら、個別の鉢へ植え替えます。細い根を傷めないよう慎重に扱い、植え替え後は遮光を続けながら徐々に通常の管理に移行します。

実生苗の最初の冬は成株より寒さに弱いため、室内の暖かい場所で管理し、少量の水やりを絶やさないことが大切です。エケベリアは交配育種が非常に盛んな属で、自分で採種・交配に挑戦したい場合は、同じ種の別個体を2株以上揃えて開花時に人工授粉を試みましょう。

SEEDSTOCKでは幅広い種・品種の種子を扱っていますので、ぜひお気に入りの品種を見つけてみてください。

🐛 病害虫・トラブル

エケベリアが元気を失う原因の大半は**根腐れ（過湿・排水不良）と蒸れ**です。特に日本の梅雨～夏は高温多湿と蒸れが重なる、複合リスクの季節です。早めに気づき対処することが、美しいロゼットを長く保つ近道です。

根腐れ（最重要）

水のやりすぎと通風不良が主な原因です。茎の基部がぬめりを帯びて軟化し、葉が次々と落ちてきたら根腐れを疑いましょう。鉢から株を抜いて腐った根・茎を清潔なカッターで切り取り、数日陰干ししてから新しい乾いた用土に植え直します。予防が最善策で、水はけのよい用土・適切な水やり頻度・通風の確保が基本です。

コナカイガラムシ・ネジラミ

- **コナカイガラムシ**：ロゼット内部の葉の付け根に白い綿状の塊として発生します。綿棒に消毒用エタノールを含ませて直接除去するか、希釈アルコール液を噴霧して対処します。見つけたらすぐに隔離しましょう。
- **ネジラミ（ネコナカイガラムシ）**：根に白い粉状・粒状の付着物が生じ、株が突然元気を失います。植替え時に根の状態を必ず確認し、感染が見つかれば根を洗浄して新しい用土に植え替えます。

ハダニ・キノコバエ

- **ハダニ**：葉裏に細い糸状の網と小さな斑点が現れます。強い水流で洗い流すか、殺ダニ剤を散布します。
- **キノコバエ**：成虫自体は無害ですが、幼虫が根や実生苗を食害します。黄色粘着トラップの設置と用土の過湿を避けることが予防の基本です。

徒長・葉焼け

- **徒長**：日照不足で茎・葉の節間が広がりロゼットが崩れます。いったん伸びた部分は元に戻らないため、十分な日照で予防します。
- **葉焼け**：急な直射日光への移行で葉が白く褪色・変色します。遮光50～70%を守り、環境に徐々に慣らしましょう。

多くのトラブルは「水のやりすぎ」「蒸れ・通風不良」が根本原因です。乾かし気味・風通しよく、を心がけることでトラブルの大半は防げます。実生苗の時期はカビ（立ち枯れ）にも注意が必要で、殺菌剤を希釈した腰水が有効な予防手段となります。

✎ 栽培メモ



エケベリアの種子を探す
QRを読み取る／seedstock.jp